

役藍泉の撰文による墓碑

一、亀井南冥と藍泉

南冥の公私にわたる数多くの知己の中で、僅か一会によって断金の交わりを結び、その後、再会の機会を得なかつたとはいえ、血縁以上の因縁を以て亀井一門と結ばれた親友、それが藍泉であつた。

互いに魂を開き合い、肩を寄せあつた一味同気の姿を思わせるものであつた。南冥に忌憚のない忠告を与え得る識見・才能を抱き、南冥もまた、その多年にわたる苦樂を率直に披歴して止まなかつた二人の間柄は本居宣長と賀茂馬淵との松阪での一夜の語りにも酷似している。

藍泉の本姓は島田氏、累代修験道を奉じ、徳山教学

會員 清 木 素

院の住持を勤め、役小角の放流を受けて「役」を姓とし、法名を「淨観」、号を「興山」と称した。滝鶴台より徂徠学を受け、天明五（一七八五）年、徳山藩に藩校鳴鳳館が開設されるや、本城紫巖と共に文学教授役になり、紫巖は専任で、藍泉は教学院の法務のかたわら、その余暇をもって勤務となつた。

藍泉の当時、文学界における地位と亀井家との関係について広瀬淡窓は、次のように述べている。

「藍泉ハ修験ナリ。亀井家父子極テ此ノ人ヲ重ンズ。

昭陽（南冥長男）少年ノ時、山陽ニ学ビ、行キテ

謁見シ弟子ノ礼ヲ取レリ。之モ詩文ノ風、李王ヲ

学ビ、徂徠ノ説ヲ宗トスル故ニ、亀井ト同調相合

スル者ナリ。其人ハ篤実ノ君子ナルヨシ。」

南冥と藍泉とが相知るに至った経緯については、藍泉の友人青木葵園が関西の遊学から帰省して、しきりに南冥の文名が彼の地に高きを称揚するによって、漸くその印象を濃厚にした。安永二（一七七三）年、葵園は九州に遊び、南冥を福岡府下に訪ね、その「磊落な英士」に心打たれ、恐らくこの席上、藍泉をはじめ徳山士人の文風品格が話題となり、南冥を徳山に誘う路線が設定されたことであろう。それより四年後安永六年春、南冥二度目の東遊の途中、徳山を通過した際、青木宅で藍泉と初対面し、忽ち肝胆相照らす仲となる。時に南冥三五才、藍泉二七才であった。清風明月の下、酒を酌み交わしつつ、文を語り、詩を談じ、経術を論ずれば、新知もいつしか旧知の如き、詩賦の応酬に夜の更けるのも忘れる程であった。

「奉和興山役公寄示之韻（南冥詩集より）」

新知の樂しみを識らんことを欲し、相傾くること故心の如くす。清風は秉燭を吹き、明月は披襟

に對す。愧ず我が巴人の調べにして、君が郢國の音に和するを、厭々として醒めては又酔えば、鶴唳城陰に落む。

徳山の士人の温い歓迎と思いがけぬ知己を得た喜びに、南冥の夢は、月に導かれて仙人の世界に遊ぶようだった。

藍泉の「徳府学範」において、鳴鳳館講学の目標に「忠恕」の二文字をあげている。この「忠恕」の二字は、論語の「夫子之道忠恕而已」から出ている。

平成四年一〇月、天皇は中国訪問前の記者会見の際に、「私の好きな言葉に」忠恕」というのがあります。これは自分に誠実で、そして人の心を思いはかるという意味のことです。」と申されている。

洋の東西を問わず、時代の古今に拘らず、真の平和的文化国家建設のための真情から出た言葉であろう。

二、亀井昭陽と藍泉

南冥と藍泉との交わりは特に深く、その長子昭陽を

彼に託していた。昭陽は、しばしば徳山に往来し、藩主就馴のために荷亭十二勝を賦した。昭陽は、豊前の老儒石川彦岳から、当世の文人を問われて「東に古梁あり、西に藍泉あり、未だその他を知らず。」と答えており、亀門の藍泉に対する敬服の度を推察することができる。

(註Ⅱ古梁は、仙台瑞鳳寺一四世、詩文に優れ有名) 藍泉の詩社を幽蘭社といって、昭陽も一時その門に入ったことがある。徳山藩の林正忠・浅見敏・松岡松陵・国富彦恭・町田淵・松原融らの門人と交わっていた。

昭陽は書家でもあり、現在子孫は、室積に転住されているが、今も徳山居住時代の書幅「聖謨洋々嘉言孔彰」(書經)が室積磯部家の茶室に残存している。

昭陽は、徳山藩校鳴鳳館三代教授采石長沼先生墓碑(大迫田墓地)に亀井昱拝撰(昱は昭陽)とあり、同じく同墓地に、藍泉の撰・書の「奈古屋藏人君墓碑」があるのも、藍泉と亀井家との因縁深く、二一五年前

の昔を想い起こさせる。

三、福川の福田龍助の墓と藍泉

師弟愛の碑の中では、教え子たちが恩師に対して建立した碑がほとんどであるのに、師(藍泉)が教え子の墓に撰文されたのが見付かった。墓の左右後面三面に銘文が残されている。

不明なところもあるが、拓本によって全文を紹介することにする。

「為福子龍墓悲夫子龍福川人福川学雖曰子龍艸創之可也子龍始嗜歌好詩文蓋人皆謂文学何於市捨尔交易費心無用段使錦冊囊實錢不直守錢虜託其為仁不富說雖是競咭今自喜其極至利所在骨肉賊不亦左乎子龍自從余学月必數往來數里移晷而去類未曾知市有折退当其職亦大穎且其人謙冲温接物不格至孝友則頗天性云以故所謂守錢虜亦不能客喙子龍□□子龍以年末而立掄為街長豈無老族唯其温籍称衆望已斯數年患血經歲不已遂以寛政五年癸丑六月日死年

僅三十葬干真福寺其弟孝助出繼河村氏住我府下泣
告狀請碑其墓因銘之銘云

交易安職其業不疎文雅養志其技、有餘温籍足以□

藍泉水 役觀謹誌

福田龍助光久「

四、田布施町の菅原社由緒碑

藍泉撰文による、次のような碑文が熊毛郡田布施町
にも残されている。

「田布施邑菅廟碑

斯邑有菅廟不知其草創何歲盖公左降干西也滯船干
我州岸者數所皆建祠祭之即若勝間菅廟最其較著者
也斯邑亦公所維纜者即有洲鴈詠而失其下句可惜盖
公赴西洲實延喜元年而其滯勝間者春夏交則過斯邑
者必二三月交邪當其時斯邑猶稱波野實為海圻而今
則斥鹵作田名田布施陵谷交遷寧得象景如舊觀耶廟
有神像靈異殊其屢經火災而像不燒或自飛在干宮堦

外實出人意表以故遐迕尊崇遂為闔郡總鎮每歲二月

邑修祭典遐迕輻湊來往成市相傳斯像菅公所自製者

以故靈異如此焉是邪非邪歷數百年而廟社愈加粧飾

至今日者足以觀公遺德維遐陬僻邑不敢護焉嗟乎使

公逞志當時則茶々功業可以施其世者必可斯而其歷

千歲人全思慕者如斯與否未可斯焉乃若公則蹇艱干

生前而榮曜乎自後猶仲尼不遇干其也而為大聖乎後

世神而知之其意如何今茲九百年享祀上自王朝下至

民間苟有廟祠者無不祭者建供焉斯邑亦嚴祀典自建

一巨碑請言干余因舉概略以記碑而後為其頌頌云

波野何有 有沚有洲 公之來止 斯維之舟

鴻鴈干飛 下上其音 公之來止 斯遺之唵

公所憩息 不啻甘棠 有閉其宮 黍稷維芳

黍稷維芳 神降之禱 民是思之 有斯石碑

享和壬戌春 周陽德府藍泉役觀謹撰

岸 成信

水田 由登 敬建之

塩谷 高勝

五、波田兼虎と藍泉

字は土熊・高山と号した。波田家の先祖は、秦の国より我が国に帰化して秦氏と名乗っていたが、石州波田に移住し波田と改めた。須佐の育英館二代館長となり徳山藩との親密な関係を保ち、鳴鳳館の本城紫巖と共に学び、藍泉とは詩文関係を学んだ。

育英館と鳴鳳館との交流も親密であり、双方からの文書も残存しており、兼虎の墓碑には、長文の藍泉の碑文が残存している。

舊跡十八世	本山職院京
教学院	正大先達浄観塔
中興 六世	十乘院峯本
	坊両院兼職
文化六年九月廿八日	



役藍泉墓所